

芸術と信仰の島に見る活性化の一考察

1130500 宮原 大智
高知工科大学マネジメント学部

1、概要

今回の卒論では、まず第 1 章で芸術による小豆島の活性化について考える。2010年の瀬戸内国際芸術祭や小豆島独自の試みとしての三都半島で行われた芸術家村を通しての地域活性化を考察した。次にこれらの芸術の原点というべき一枚の水彩画を検証した。黒田清輝は小豆島にきたのか、描かれた土地や周辺の芸術家の滞在する旅館について調査した。第 2 章は「二十四の瞳」に代表される映像による地域活性化の考察である。最近の映画「八日目の蟬」や「瀬戸内国際こども映画祭」を通しての地元の取り組みと今後の方向性を考察した。第 3 章では小豆島は古くから信仰の島として知られているが、島の遍路の歴史や小豆島のキリシタンについて考察し、これらを通して地域の活性化について考えてみた。なお、活性化に対するテーマが多岐にわたるため、各章ごと最後に自分の考えをまとめつつ、第 4 章で総括を述べる。

2、背景

私が生まれた瀬戸内海に浮かぶ小豆島の面積は 152.3 km² で人口は約 3 万人、県木でもあるオリーブの生産量は全国の 90% を誇り、素麺、かどやのごま油、しょうゆなどの特産品もある。以前は 3 つの町で構成されていたが、現在は 2 つの町で、自分が生まれた土庄町は四国や岡山からの観光客を迎える表玄関ともいえる土庄港があり、つい最近、愛称が公募により「オリーブポートのしょう」と決定した。ホテルや民宿なども集中しており、ただ残念なことに最近、少子高齢化や過疎化の進行により路線バス事業の継続が断念され、小豆島バス株式会社に変わって地元住民が出

資の小豆島オリーブバス株式会社が 2010 年 4 月から運行を開始している。このことは小豆島の観光における活性化に大きな影響を与えている。

3、目的

本研究は、小豆島の観光客数の現状を調査し、今後、観光客数を上昇させるための方法、対策を提案したい。

4、研究方法

本研究は、初めに、いろいろな角度から小豆島の観光に関わる資料を集める。そして地元の土庄町の商工観光課長やイギリス人教授に話を聞き、それを元に今の現状、今後の課題や調査を進めていく。最後に、調査をもとに小豆島の観光客数の上昇を目指したい。

5、結果

第 1 章 小豆島と芸術について

前回の瀬戸内国際芸術祭や三都半島の芸術家村など現代アートによる小豆島における活性化は成功といえるかもしれない。現代アートを通しての地域とのかかわりや地区住民の参加により瀬戸内国際芸術祭は小豆島の人に支えられ 2013 年の開催へと進む。このように地域を含めた継続性と持続性が重要であるし、参加した若い芸術家が将来、さらに成功することを望みたい。そして、瀬戸内国際芸術祭は、現代アートを大勢の観光客に楽しんでもらうことも必要だが、瀬戸内国際芸術祭を契機として、それぞれの地区が、住民たちの力で元気になっていかなければならない。来年の小豆島での現代アートの展開は、小豆島各地で行われる。アート作品の決定や作品制作などが始まっていけば、小豆島の活気もこれから高まっていく。2 つ

の町が協力し島全体がひとつになって、小豆島の魅力を再発見し、全国にアピールする機会になることが必要である。小豆島中に展開されている現代アートの作品は、それだけで地域資源、観光資源になって全国からの観光客の誘致に一役買うことになる。瀬戸内国際芸術祭をきっかけとして、小豆島の持つ素晴らしい、自然、文化、伝統などを利用し、さらに展開させていかなければならない。そして、これらの小豆島の芸術の原点は大正 9 年 5 月に黒田清輝が鹿児島から東京への帰路、小豆島に来島したことにはじまったと考える。一枚の描かれた水彩画から黒田自身が小豆島に興味を持っていたことがわかってきた。その後、同じ東京美術学校から多くの画家が訪れ、多くの作品を森口屋に残し、現在も東京芸術大学の学生たちが創作活動に訪れている。こういった歴史的事実を踏まえ、今後の小豆島の活性化に芸術をどう生かしていくか、島を上げて考えていく必要があるのではないだろうか。

第2章 映像による地域活性化について

小豆島における映像による地域活性化は宣伝不足など、いまだ課題が残っているものの、今後、最も力を入れるべき取り組みの一つであり、その目的は観光客の増加や小豆島のイメージアップであり、こうした映像による発信は島内各地区の伝統行事や祭り、風景、人情に及び、これらは当然ながら観光産業に密接に関連して、宿泊施設や観光施設、売店、など多岐にわたる。今後も小豆島の芸術祭や映画製作などに島の資源である美しさを活かしつつ、小豆島の未来を担う次の世代の子供たちを育てることや、人と人との触れ合いの場を形成することで全国での地域活性化のモデル地区になる取り組みが行われることが望まれる。

第3章 信仰の島としての地域活性化のヒント

島四国 88 箇所 遍路の霊場が島のいたるところにあり、毎年大勢のお遍路さんが島を訪れてい

る。そんな中で最近では自分探しの学生も多く見られる。そしてそれらの霊場はどこも、歴史の重みを持ち、神秘的な風格を保ち続けている。イアン先生がいうように山岳霊場の持つ神秘さと荘厳さは、信仰だけでなく観光資源として大いに活用されるべきである。また、島のあちこちに神社や社祠がある。立派な八幡さんの社殿があるだけでなく、名もないような社祠が島のあちこちに、無数とっていいほどに点在している。これらの多くは南北朝時代の城くずれの神として今日に残っているものだろう。映画「八日目の蝉」の中では、山岳霊場の護摩供養、遍路さんの姿、古びた小さな社祠などを、なにげなく映像に映し出している。そして小豆島は、キリスト教、隠れキリシタンにも深く関わっている。戦国時代の末期、日本でキリスト教の布教が広がった。しかし、やがてキリスト教弾圧が始まり、迫害が日本中で行われた。高山右近も、小西行長に誘われて小豆島の中山に身を隠した。小豆島にはたくさんの隠れキリシタンが住んでおり、「らんとうさん」と呼ばれる豊島石の変わった墓が島中にある。こういった歴史の中の神々を新たな観光スポットとして小豆島の活性化のために役立てる必要がある。88箇所と同様にパワースポットめぐりや神秘体験ツアーなどを企画し、神々の宿る島、先人の残してくれたこの島の魅力を守り育て、日本と世界に発信していかなければならないと思う。

【参考文献】

黒田記念館ホームページ 私の履歴書「猪熊弦一郎」西村のあゆみ 読売新聞 1988.6.8 西村の野を歩く 「小豆郡誌」「黒田清輝日記」1920.4.22 「讃岐キリシタン史」「四国キリシタン史」「キリシタンと小豆島」「土庄町史」「内海町史」「池田町史」「近世小豆島社会経済史話」